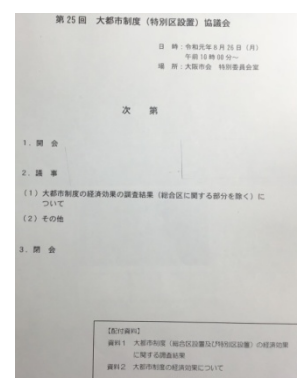


## 第 25 回大都市制度協議会を傍聴する

写真は大阪市役所。この 7 階大阪市会特別委員会室で 26 日 10 時から第 25 回大都市制度（特別区設置）協議会が開かれた。朝一番で市役所に行って、2 時間余り会議を傍聴した。議事は「大都市制度の経済効果の調査結果について」。前回は傍聴したが、松井市長が特別区の「経済・財政効果」についても議論すべき、という発言を受けたものだ。



調査を受託した嘉悦学園から 3 人が出席して、通り一遍の説明がなされ、各党委員から質問と質疑が行われた。嘉悦学園「報告書」はネットから入手して読んでいたが、傍聴して担当者からの説明と質疑を聞いて、ますます疑問が膨張した。



分厚い協議会資料が入手できた。ネットからも得られるが、こうして「紙の資料」を手にとると、じっくり読みたくなる。

資料を読みこんだコメントは次回しにして、傍聴して感じたことを「記録」として書きとめておきたい。

まず第 1 に、松井市長の「魂胆」が首尾よくいったかである。維新は公明をねじ伏せ、協議会でも嘉悦報告書の「お墨付き」を得て、「都」構想の経済・財政効果を喧伝する狙いがあったと思う。傍聴して松井市長の顔を見ていると、途中からイライラしてきた感じが読みとれた。自民や共産、そして公明の委員も、トーンは違っていたが、報告書に疑問を投げかけていた。せつかく協議会の場に嘉悦学園を呼んで説明させたが、首尾よく「こと」は進まなかったのでは。でも維新のことなので、どうなることやら。

第 2 に、今回初めて嘉悦学園担当者から説明を聞いたが、何回も繰り返された「学術的」という言葉に違和感を覚えた。確か 1000 万円で報告書を受託した嘉悦学園らしく、はじめに「都」構想の経済・財政効果ありきの結論が見え見えであった。説明と質疑の過程でも、それが垣間見えたことが、今回の傍聴の成果であった。議論が集中した「U 字カーブ」や予算と決算のギャップ、大阪府への移管事務などについても、明快な説明・回答がなかった。目だったのは、維新の委員への「提灯もち」的な対応である。

第 3 に、こんな嘉悦報告書の議論を協議会で蒸し返す意味である。松井市長や吉村知事ら維新の魂胆は分かるが、もっと議論すべきことがあるのではないかと。今日の議論を聞いていて、なぜ消防や下水道を特別区から大阪府に移管するのか。とりわけ大阪では防災対策が喫緊の課題となるなか、特別区から消防を取りあげていいのか。協議会で、こうした市民生活に関わる事務事業のあり方について、じっくり議論されたのか。政令指定都市=母都市としての大阪市の役割について、周辺市と大阪府も含めて検討されてきたのか。「都」構想の効果ばかりに目を向け、短絡的な議論に終始していないか。

(2019 年 8 月 27 日)